

やや難

3. 一般に、「文明開化七つ道具」とされるのは、新聞社、郵便、ガス灯、蒸気船、写真絵、軽気球、<sup>おか</sup>陸蒸気などである(あんパン、博覧会を入れることもある)。なお、電灯が普及し始めたのは明治末期から大正期、ラジオ放送が開始されたのは大正末期の1925年、活動写真が初めて輸入されたのは1896年。
4. サマータイムは、中高緯度に位置する国・地域で、日の出が早くなる初夏から初秋にかけて、時間を標準時より1時間進める制度。1時間早く朝を迎えることで、照明・冷房のエネルギーを節約できる、日中の暑さを回避できる、勤務後の余暇時間が増えて、消費が拡大するなどの利点があるとされる。

★ワンポイントアドバイス★



やや長めの論述問題が1題出題されている。このような傾向は今後も続くと思われるので、十分な対策が必要である。

<国語解答> 《学校からの正答の発表はありません。》

- 一 問一 ア 問二 オ・キ 問三 難民 問四 ウ 問五 オ 問六 興味をも  
～ のなのに 問七 ア 問八 ウ 問九 ウ 問十 無じゃ気な少年期を終え  
ていく自覚はなかったこと。 問十一 イ 問十二 これからど
- 二 問一 A ウ B エ C オ D イ 問二 機外に目をやりぼんやり物思いにふ  
けること 問三 ウ 問四 歩きスマホ 問五 スマホを手放さず想像も創造もで  
きなくなり文明を失いそうである 問六 考えたり議 ～ べてしまう 問七 物を  
考えずに何か造り出される 問八 ア・ウ
- 三 1 裏返 2 刻 3 粉 4 細心 5 本領 6 歌詞 7 小康 8 復旧  
9 首脳 10 記帳
- 推定配点○
- 一 問六・問十二 各4点×2 問十 5点 他 各3点×9  
二 問二・問五 各5点×2 問六・問七・問八 各4点×3 他 各3点×6  
三 各2点×10 計100点

<国語解説>

一 (物語—論理展開・段落構成、心情・情景、細部の読み取り、空欄補充、ことばの意味、記述力)

基本

問一 直後が、「……ある日、思いきって中へは行っていった」である。半開きのドアは、入っ  
ておいでと「誘っている」ように感じたのである。

やや難

問二 —— 線1直後にある「どこにでもするっと～感じなかった」から考えられることは、少年独  
特の感性で行動しているということなので、それが今は失ってしまったということでオが選べる。  
「そしてほくは、灯台守がそんなにいい子として……」で始まる段落に「その頃ちょうど」とあ  
るので、『今』と表現しているのが、二度目に灯台を訪れた14歳の時ではなく、14歳の頃のこ  
とも回想であると思えるが、だからといってア・イ・エのように成人または老人になった『今』と  
は確定できないし、ある程度の地位についているかも不明である。また、13歳の時に灯台に行っ

たことが「悪」ではないので「善悪の判断」としているウは誤りだ。キの「何事も自力で」にもはっきりした根拠はないが、この物語が、少年のみずみずしさを失っていく頃というテーマであるのでキを選ぶ。

問三 「ファシストの脅し……」があった頃とは、イタリアのムッソリーニが、ドイツのヒトラーと提携を深めることになった頃、1939年に始まる第二次世界大戦直前の頃である。「夏の終わりに……」で始まる段落に、「一年後ウェールズに行くことになった」とあるのは、戦争被害、人種差別、民族迫害などさまざまな理由で、自分の身を守るために国外に脱出する「難民」になって行ったのである。

問四 ウとオで迷うところである。「いかにも灯台守という感じ」という印象を受けているので「現実離れした幻想的」という表現には違和感がある。「細い線の上」と表現しているのは、子どものような、それでいても子どもとは言えないような不安定な時期と重なっていると考えられる。したがってウのような心情といえる。

**重要** 問五 状況を考えよう。見ているのは望遠鏡である。(2)直後に「望遠鏡がとらえている空」とある。つまり、望遠鏡から見える空なので「まるい」空である。

問六 「ふだんからどのような思いがあったからだ」と『ほく』は推測しているか」が設問である。灯台守自身ではなく、「ほくの推測」であることに注意しよう。「そう、灯台に……」で始まる段落に着目しよう。灯台守は突然訪れた「ほく」に驚くどころか「まったく自然なことだ」と思っているらしい態度だった。この部分でも内容としては解答になるが字数が合わない。そこで「興味を持つ～よさそうなものなのに」「そう言っているみたい」に着目すると、灯台もりの気持ちとほくの推測が成り立つ。

問七 明かりもすばらしいものだったが、——線5で見入っているのは「神さまが光あれ」というように、そして、指揮者のように手を動かすと、それに合わせてすばらしい光が点滅する動きをすることなのでアだ。

問八 「言いつのる」とは、調子に乗ったり、興奮したりして次第に激しい口調になること、この場合は、自分であることを懸命に思い出してもらいたい「興奮」であるのでウだ。

**重要** 問九 灯台守の中では、一年前の「ほく」が「イタリアから来た男の子」であるのだ。「灯台守の記憶の中」の「ほく」以外は「ほく」ではないのだから、「ほかの人」は、彼の記憶のなかの「ほく」である。

**やや難** 問十 「この変化」とは、「その頃ちょうど、……」以降に書かれている「少年が～失い」の頃の変化である。「男の子」とは呼べなくなる年頃だろう。しかし、それが自分でわかるのはその時期を過ぎた頃だ。つまり、「自覚」がないままに、その時期を通り過ぎるのである。

問十一 灯台守が、去年の自分であることを認識できなかったことに対して怒りを覚えているのではない。自分自身で去年の自分とは異なることを理解し始めたのだ。したがって、怒りやショックというア・ウは誤りだ。また、「混乱している」、「納得がいかず」のエ・オも誤りである。

問十二 「予感させる一文」である。「灯台にはよく磨かれた……」で始まる段落に、灯台守が気圧計を説明している場面がある。「これからどうなるか～人間と同じにな。」が「予感」を表す言葉である。

## 二 (随筆一要旨・大意、細部の読み取り、空欄補充)

**重要** 問一 A (A)をふくむ段落に、「通路側を希望する人は、まずいない『しかし』……」と展開している。最近ではあえて指定する乗客が「増えてきた」という流れが自然だ。B SF小説でも映画でも、筋は「みな同じ」だということになる。C 「心がない悪役はいかにもそれらしい姿をしている『だが』……」と「だが」でつないでいることから考える。悪人ヅラした悪人など